広報伊達 144

発行日　令和５年３月８日
発行者　伊達地区小学校長会
　　会長　遠藤和宏
編集　　同　広報部

《巻頭言》

「みちしば」と「あらくさ」

伊達地区小学校長会副会長
平久井　淳
（伊達市立梁川小学校長）

「みちしば」と「あらくさ」。どちらの言葉も同じような意味を持つ言葉ではないでしょうか。「みちしば」は，道ばたに生えている芝草，雑草のこと。「あらくさ」は，荒れ地の雑草，名もない雑草などの意味があるようです。

私が教員として採用されたのは元号がまだ昭和で，最初に担任したのが５年生。「最後の４５人学級」と言われた学年で，児童数は見事９０人ちょうど。持ち上がりで２年間，４５人の子どもたちと，今思えばどうやって過ごしたのだろうと思ってしまいます。次の２年間も持ち上がりで５年生・６年生と担任しましたが，学年３学級となり，１クラスの児童数は３２～３３人となりました。科学技術面（？）で言うと，先輩諸氏が和文タイプを使い，書院だ文豪だとワープロ専用機が幅をきかせていた中，ＰＣ９８シリーズや一太郎 Ver.3 が少しずつ広まってきた時期で，学校に導入された１台のＰＣ９８を教員みんなでシェアしていた時代でした。ちなみにその学校では，その時期，毎年新採用教員が２～３名配置され，今の本校と似たようなところがあったと思います。

私はその学校で２年間ずつ，Ｅ先生とＴ先生という，お二人の学年主任の先生に大変お世話になりました。お二人ともその学校で定年を迎えられる，自分の親より年上の学級経営手腕に富むベテランの先生でした。「みちしば」と「あらくさ」は，そのお二人が発行してくださった学年だよりのタイトルです。タイトルの意味合いも似ていますし，すべて手書きで，お二人の字体がとてもよく似ています。いわゆる「ガリ版」独特の筆跡だったのでしょう。その後自分で学年だよりを発行したり，本校の学年だよりを読んだりしていますが，どれもタイトルには，それぞれの思いがこもっているものと感じます。

お二人の先生にはたくさんのご迷惑をおかけしたし，たくさん助けていただき，私の教員としての基盤を作っていただきましたが，学年だよりにこのようなタイトルを付けられたお二人にはどのような思いがあったのでしょうか。

Ｔ先生に一度だけ学年だよりのタイトルに込められた思いを尋ねたことがありましたが，「あらくさＮｏ．１４」に，こんなことを書いていただきました。「『あらくさ』とは雑草のことです。何気なく道ばたに小さな花をつけている草に目をやると，その生命力の強さには驚かされます。（中略）子どもたちには，何にでもへこたれない力強さを願っています。見逃してしまいがちな草花も色とりどりの花をつけ，私たちをなごませてくれます。個性を持った子ども一人一人を正しく伸ばすために，教師と親が手を取り合っていきたいものです。」

少子化の進行やＧＩＧＡスクール構想に伴うＩＣＴ機器の導入，３５人学級の導入や大量退職・大量採用，若手教員の増加等，私たちを取り巻く環境はめまぐるしく変化していますが，それは今に限ったことではないと感じています。働き方改革も遅々として進まない印象ですが，三十数年前の学年だよりのＢ５版紙ファイルを引っ張り出し，私たちの思いをいかに子どもたちに届けるかということは，いつの時代も変わらない，変わってはいけないのではないか，また，自分が「なんで教員を目指したんだっけ。」と改めて思い起こしました。

《研究部より》

伊達地区小学校長会の強み

研究部長　鈴　木　　茂
（伊達市立大田小学校長）

1　はじめに

令和４・５年度は第Ⅱ期研究となり，今年度は，福島県小学校長会研究協議会会津大会につながる重要な年でした。その重要性を校長先生方が十分に理解し，実践研究に取り組んでくださいました。心より感謝申し上げます。

2　令和４年度の研究を振り返って

今年度からは，地区内の学校数減少に伴い，３つの分科会から，以下のように２つの分科会にグループを再編制して研究を進めました。

＜発表分科会＞

【第５分科会「健やかな体」視点２】
体験を通して実践的な態度を育む教育課程の編成・実施・評価・改善（環境教育）
研究推進校：伊達東小，梁川小，粟野小，大田小，柱沢小，石田小，睦合小，半田醸芳小，国見小

＜希望分科会＞

【第９分科会「自立と社会性」視点１】
子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進
研究推進校：伊達小，堰本小，保原小，上保原小，掛田小，小国小，醸芳小，伊達崎小

福島県小学校長会研究部からは，校長の働きかけの有効性を協働的に究明するように求められています。本地区においても，このことを共通に理解し，校長が「いつ」「誰に」「どのように」働きかけるのかを明らかにすべく，各分科会において実践研究に取り組みました。

その成果を，中学校と連携した伊達支会大会の開催と「研究集録」の発行により，共有しました。このことは，地区としての研究を深めると共に，私たち校長にとって，自身の資質能力を向上させることにつながりました。「研究集録」については，人事異動で伊達地区においでになる校長先生方にとっても，学校経営上，おおいに参考になるはずです。研究をまとめ，発表された石田小の本田先生，粟野小の佐藤先生，上保原小の伊藤先生に，感謝申し上げます。

3　令和５年度の研究に向けて

令和５年度は，県大会発表となります。伊達地区小学校長会の研究は，他地区の研究に勝るとも劣らない内容であると，研究部長として自負しております。発表の機会を得て，本地区の手法を含めた研究を披露し，県内の校長先生方からご意見をいただくことは，これからの本地区の小学校経営そして教育活動の充実に寄与するものと考えます。そこで，発表分科会である第５分科会の準備を，小学校長会全体で支えていきたいと思います。

なお，第Ⅱ期研究は２カ年で取り組むものです。県大会を研究発展のための契機と捉えて実践を継続し，新たな成果を見いだしていくことになります。

また，令和５年度末には，県小学校長会から次期研究の手引きが示されます。その折には，研究分科会の決定や組織編制，研究計画立案等，新たなスタートのため，ご協力をお願いします。

4　おわりに

伊達地区小学校長会は，「伊達はひとつ」を合言葉にしています。先生方との共同研究を通して，さらに実感しました。これは伊達の強みです。その強みを生かして，子ども達の笑顔のため，今後も研究を進めていきましょう。

《生徒指導部より》

生徒指導部調査から見える今後の方向性

生徒指導部長　笹　川　光　威
（伊達市立伊達東小学校長）

はじめに

令和４年度，生徒指導部で行った「『東日本大震災・原子力災害』に係る生徒指導上の諸問題」に関する３つの調査の結果及び考察はすでに公開されているが，改めて考えてみたい。

１　〔調査Ａ〕子どもたちのこころのケアに向けた校長としての取組

震災発生から１２年が経過するが，県内には，いまだ１９００名余の震災による区域外就学の児童がおり，震災により心に何らかの傷を受けた事が要因と思われる反応を示した児童は２３００名余にのぼる。この数は，平成２４年度以降で最多となった。校長として，区域外就学児童へ配慮しつつも，すべての児童に対して，ＳＣやＳＳＷなどを活用しながら，全職員で児童理解と心のケアに努めることがより求められる。

また，ＳＣやＳＳＷの活用では，発達障がいに関する内容の増加が見られる。普通学級に在籍する児童も含め，支援を要する児童に適切な指導を行い，悩みを抱える保護者と連携し，きめ細かな合理的配慮を形成するなど，特別支援教育のさらなる充実も併せて求められるのではないか。

２　〔調査Ｂ〕「不登校」「いじめ」「虐待」「暴力行為」の未然防止と早期解消に向けた校長としての取組

不登校児童数については，本地区においても増加傾向にあり，さらに，学年が上がるにつれ人数が増加する傾向も県と同様である。いじめの認知件数は，本地区においてはやや減少傾向も見られるが，県全体では横ばいとなっている。

各学校において，不登校，いじめとも，個に応じた指導が行われているが，校長として，多様化する要因を探りながらチームとして適切な対応をとれる体制強化が求められる。さらに，最も重要なことは，「楽しい学校づくり」ではないかと強く感じる。分かる・できるを実感させるための授業の質的改善や，自己肯定感・有用感を感じることができる親和的な集団作り等，日常的な指導の積み重ねが，早期発見・未然防止に効果的であることは，変わらず大切な視点であろう。

３　〔調査Ｃ〕ネット・ＳＮＳ利用の実態と校長としての取組

令和５年１月３日の福島民報新聞に，本件に関する記事が掲載された。（～より～までは記事の抜粋）

～児童のネット利用時間は，１日あたり平日３時間以上が１１％，休日３時間以上が２７．３％に上がった。（中略）長時間利用が常態化している現状が浮き彫りとなった。（中略）フィルタリング機能の設定について「分からない」と回答した児童はネットを利用する児童の４１．４％だった。（中略）横山貴英会長（福島一小校長）は「今後は幼稚園とも連携し，幼児教育の段階から適切な使用方法を指導する必要がある」と語った。～

ＧＩＧＡスクール構想による一人一台の端末貸与により，各学校においても授業及び家庭学習における端末利用の時間が必然的に増加する中，よりよいメディアの利活用について，保護者への啓発をさらに進め，児童の望ましい生活習慣の確立に力を尽くす必要がある。

おわりに

３つの調査について述べてきたが，昨今，ヤングケアラーなど，新たに対応が求められる課題も現れた。世の動向や問題に敏感となり，各校および各児童の状況や課題に応じて策を講じ課題解決が図られることを望む。

お忙しい中，各調査にご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。

《特色ある教育活動》

桃里に輝く上保原っ子の育成を目指して

伊達市立上保原小学校長　伊　藤　　栄

上保原小学校は，令和６年に創立１５０周年を迎えます。１００周年の時に，今の校章と校旗を制定しています。校章は，桃の花柄を図案化したものです。この上保原の地は，春になると美しい桃源郷となり，この花園に囲まれた上保原小学校が，地域の桃の歴史と共に益々発展することを願って，校章の図柄に取り入れたそうです。

このように地域と共に発展してきた本校は，今でも地域の「ひと・もの・こと」に恵まれ，支えられております。その地域の素材を生かし，地域の方の協力を得て実施している，本校の特色ある教育活動のいくつかをご紹介いたします。

○２年「だんご飾り」

地域の方と一部の保護者の方のご協力で実施しています。昔から行われている行事のいわれについて教えていただき，実際に体験しながら地域に伝わる行事に込められた願いに触れています。

○３年「アップル探検隊」

地域の果樹園のリンゴの木を１本お借りして，受粉・摘果・収穫の作業をさせていただきます。その際，自分が描いたデザインのシールを表面に貼ることで，世界に一つだけの自分のデザイン入りのリンゴを作成させていただいています。

○５年「米作り」

学校の目の前の田んぼで，田植えと稲刈りの体験をさせていただきます。米作りの一端を味わわせていただいています。

○５年「しめ縄づくり」

お正月のしめ縄飾りづくりにチャレンジです。難しさを体験しながらしめ縄に込めた想いを学んでいます。

このように，地域の協力を得て，「ふるさと」学習の充実を図り，「桃里に輝く上保原っ子」の育成を全職員で目指しております。

「石田っ子」の学びを振り返って

伊達市立石田小学校長　本　田　一　意

本校は2月1日が創立記念日にあたり，先頃１４９年目をスタートさせました。この歴史を振り返ってみますと，まさに「本校ならでは」の特色ある教育活動を行ってきたことが分かります。

かつてはソニー理科教育振興資金の受賞，学校林を活用した様々な緑化活動，こども郵便局の活動などが行われ，東日本大震災以降は，みどりの少年団活動を継続させるとともに，岡山県新見市に本部を置く公設国際貢献大学校の支援を受け，各国大使との交流や大使館等の訪問，災害見舞いなどの国際理解教育が本校教育の柱に加わりました。具体的には，東日本大震災で支援をしてくれた国々に，本校児童が「キッズ・アンバサダー」として復興の証である福島の子どもたちの元気な姿を届ける「キッズ・アンバサダー・プログラム」に取り組んできました。これまで訪問した大使館だけでもトルコ，イラク，イラン，フィリピン，ネパール，ミャンマー，エクアドル，キルギス，スリランカが挙げられ，さらに政府機関等も訪問してきました。近年は，復興庁を「オンライン訪問」し，復興の担い手である子どもたちの学びと成長した姿を見ていただきました。今年度は国際移住機関の代表者を本校に招き，「人が移住すること」の意味や背景を知り，そのためにどのような支援を行っているのかを学びました。

また前述のプログラムとは別に，地域の方が「ルワンダの教育を考える会」に携わっているご縁で，同会代表のマリールイズさんの講演や同会が運営しているウムチョムイーザ学園の子どもたちとオンライン交流やメッセージのやり取りをしてきました。ルワンダの子どもたちも小学校６年間を終えると中学生になりますが，時期が日本よりも遅く夏頃になります。そのため，先にルワンダの子どもたちが本校卒業生にメッセージを送ってくれました。ルワンダの子どもたちは中学生になるためには国レベルの試験に合格しなければなりません。そこで本校からは試験に臨む子どもたちに応援のメッセージ（動画）を送りました。同じ世代の子どもたち同士が同じ目線で話題を共有することの楽しさと大切さを知ってほしいということが出発点でした。学習プログラムとしてはまだまだ発展の余地が残されていますが，互いの文化的・言語的・地理的背景を踏まえて交流することは学びと好奇心を大きく刺激してくれました。

本校は，「完全複式」「少人数」という環境に適応させるように教育活動を精選しつつ，継続・発展させてきました。それは「子どもにとって最善の教育環境なのか」という問いへの答えを探すようなものだったと思います。こうした中で教育活動の質を高め，指導方法を磨きあげようとした結果，「本校らしい」特色ある教育活動につながったのだろうと思います。（これは本校に限ったことではないと思います。）

本校は間もなくその歴史に終止符を打つこととなりますが，新たな「特色ある教育」の始まりであるとも思っています。「特色ある教育を行う学校」同士が合わさり，豊かになり，「この学校だからできる教育」につながるよう，最後まで本校教育を推進していきたいと思います。

編集後記

令和４年度も伊達地区小学校長会広報を３号発行することができました。最終号である本号（１４４号）の編集に際しましてご寄稿いただきました校長先生方に，心より感謝申し上げます。コロナ禍で，人と人とが顔を合わせて広く語り合う場が激減して３年が経つ中，こうして，紙面において，校長先生方の言葉の重みや豊かさに触れることができることを大変ありがたく思います。また，次年度に向け，「伊達はひとつ」の思いをしっかりつないで参りたいとあらためて思いました。